

徒然草第五十六段末尾の解釈：ざえある人はその事

春日，和男
九州大学助教授

<https://doi.org/10.15017/12390>

出版情報：語文研究. 2, pp.39-45, 1955-05-10. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

徒然草第五十六段末尾の解釈

——ざえある人はその事——

春 日 和 男

一

小考は先に編じた校註徒然草新抄の頭註において既に注意した所であるが、その後二三の方々から質問を頂いたりしたので、こゝにやゝ詳しく記述して、大方の御批判を仰ぎたく思ふ。

徒然草第五十六段とは「久しくへだたりてあひたる人の」で始まる一節である。久しく逢はなかつた人が自分の方の事ばかり何もかも喋りまくるのは興ざめであると説き起こし、話し手の側から「つぎさまの人」と「よき人」の態度を対照的に述べ、これに付随して聞き手の側として、「いたく興ぜぬ」態度と「よく笑ふ」態度とによつてその人柄が想像されると述べ、さて末尾に、

人のみさまのよしあしざえある人はその事など定めあへるに^{おの}が身にひきかけていひ出でたるいとわびし。

と説き結んである。全体が例の連想の上に走つた記述である為、やゝまとまりの悪いといふ難点があり、未だに決定的な解釈がつけられてゐないのはその様な曖昧な本文の然らしめてゐる所でもあらう。特にこの末尾の部分は論旨を決定する重要な一文であるのに拘らず、従来の註釈書の殆どがやゝ粗漫に見過してゐるのは遺憾な事と思はれる。

先づ本文の異動については流布本「おのが身に」が一本「おのが身を」(例へば文段抄本文)、正徹本「おのれが身に」となつてゐるくらいで、いづれも文意を左右する様な大きなものではない。

さて、在来の解釈に目を通さうと思ふのであるが、徒然草の註釈書は古来数百種類に及ぶものがあり、現在店頭に列べられてゐるものでも僅に三十種類を越えてゐる状態であるので、今は比較的著名な諸家の手になるものに限つて引用することにする。

例へば、内海弘藏・橋宗利両氏共著「改稿徒然草詳解」現代

語訳としては古い地位にある内海氏の詳解（明治四四）を橋氏によつて最近（昭和二九）改訂したものに於けるこの解釈を見れば、

人の容貌風采の可否や又（多少学問ある人は）学問の事など批評しあう時、自分を引合ひにして話し出したのは実にうんざりする。

とある。次に沼波瓊音氏著「徒然草講話」（大正一四）によれば、

人の様子によい悪いを評し合ふ場合、何か芸のある人に就いて評する時には其の芸の優劣などを評し合ふ場合、自分の事を引合ひに出して話し出す人があるものだが、これではいやでたまらぬ。

と通釈してゐられる。右の二つの解釈に共通してゐる点は先づ文脈の取り方であらう。即ち塚本哲三氏著「通解徒然草」が

人のみざまのよしあし
才ある人はその（才）事 一 など定めあへるに

と説いてゐるのとほぼ同じである。「おのが身」以下も大同小異で大した問題はない。

併し、同じ文脈の取り方でも細部の解釈においてはやゝ異なる点もあるのであつて、例へば「みざま」といふ語は古来「見様」又は「身様」の文字を当てて、様態、容貌、見解、行状等種々なる訳が下されてゐるが、これは当面の緊

急な問題ではなく、むしろ次第に解決されて行く所であらう。それよりも「ざえある人は」の「は」を詳解は単なる主格を受ける係助詞と見てゐるから、「定めあへる」の主格は仮定的な「一般の人々」、及び文に明示された「才ある人」の二つが考へられる。これに對して講話では「は」を「に就いては」と訳し、特に「この『は』注意すべし。」と断つてゐるから、「ざえある人は」は「定めあへる」の連用修飾格に立ち、「定めあへる」の主格は仮定的な「一般の人々」唯一つである。詳解の訳と同趣のものは橋純一氏の

人の容貌風采のよしあしや、「モシクハ」学問のある人たち（「集マツタ場所ナド」）は学問の方面の優劣などを批評しあつて折、…（徒然草新講）

及び川瀬一馬氏（新註国文叢書徒然草）・佐成謙太郎氏（対訳徒然草新解）等の解釈である。講話の訳と揆を一にするものに例へば佐野保太郎氏の

他人の見さまのよしあしを定め合ふ時、又は才ある人についてはその方の深淺などを定めあふ場合、（徒然草講義）

や塚本哲三氏の解（通解）がある。塚本氏は特に

「学問のある人たちの集まつた場合などは学問の方面の優劣など」と解した書もあるが、原文そのものの表現

はさうは取れない。

と断つてゐられる程である。

併し以上両様の訳文を読んで感ずる事は前文と論旨の接続が變に遊離してゐる点であつて、殊に詳解以下の訳では已述の通り仮定の主格と明記された主格の二つを「定めあへる」で承ける所、文の構造を不自然に把握してゐる様に感じさせる。一方、講話以下の訳でも「学問のある人の事については、その学問の事を批評し合つてゐる場合、自分を引合ひに出す」とは又何と晦渋の極みである事か。まことに佐野氏が「此所はちよつとわかりにくいが」(講義)と正直に断られたのは無理ならぬ事なのである。然らばこの様な無理な解釈が生じた根元は何処にあるのであらうか。姑く旧註に目を通しておかう。

二

旧註といつても寿命院抄や野槌・鉄槌等には相憎くこの箇所の註釈はない。比較的古い所では盤斎抄の

人の事をいかほど定むるにわが身をあひてにしてわれほどあらむが我よりはをとりたりなど云はきよくよくあるほどにいふまじき事也となり

を引用しなくてはならない。併しこれも大雑把なもので、

むしろ意訳に近い態度である。次に徒然草句解によれば

たとへば一座の中に才智有人有て人の見さまのよしあしをいひその人はその人のごとくよしその人はその人のごとくあし等さだめあへるに……

とあつて、「そのこと」を「そのごと(如)」と取り、「才ある人」を「定めあへる」の主格とし、「人の見さまのよしあしそのごと」を連用修飾句に見立てた解釈であらうが、猶多分に無理の難がある。

更に例の文段抄で

身様也。其様躰さやうなるはよしかやうなるはあしきなど定め、又才智ある人の事の上にはさやうの事どもありなど評し定めあへる所に……

と解くに至つて、始めて現代の註釈に通ずる路を発見する。即ち沼波氏の講話以下佐野・塚本氏の註釈は大体これに準拠してゐるものと思はれる。

増補鉄槌では

その事とはそのわざなり。ざえある人は其のやうなるわざありなど評判せるに……

とあつて、吟和抄これを用ひ、現代における内海氏(詳解)以下橋氏・川瀬博士・佐成氏等の註釈の根元をなすものと思はれる。因みに諸抄大成では句解及び増補鉄槌の説を並記してあるに過ぎない。

さてこの様な新旧の註釈に共通してゐるものは「その事」の解である。旧註が「さやうの事ども」(文段抄)、「其のやうなるわざ」(増補鉄槌)と解いたのはやゝ明快を欠くのであるが、この「その事」を後世の口語訳では殆ど上位の語を受ける所謂中称の指示代名詞(連体詞)として「才能(學問)のこと」と取つてゐるのである。既に掲げた諸註釈は申すに及ばず、例へば山田孝雄博士の「つれづれ草」においてさへもその脚註にわざ／＼「其事—その學才の事」と明示してある程である。恐らくこの点が解釈上の正確さを失ふ岐路となつてゐるのであらうと思はれる。何故なれば周知の如く「その事」の「そ」は單なる指示代名詞から転じて「しかじか」・「何某」といふ或る一定の事物の指示を意味する場合があるからである。

三

「その事」といふ語は徒然草に十四箇所出てゐる。例へば九十九段の

堀川相国は、美男の楽しき人にてその事となく過美を好み給ひけり。……庁屋の唐櫃見苦しとてめでたく造り改めらるべき由仰せられけるに……たやすく改められ難き由故美の諸官申しければその事止みにけり。

に見える二つの「その事は」は用法が異つてゐること一見して明かである。前に出てゐる「その事」は上位に指示する語を持たず、文段抄が「何角につけて也」と解してゐる所のものである。現代訳でも「何ときまつた事なく、何によらずといふ意」(詳解)と解して別に異存はないのである。これに対して後に出て来る「その事は」指示すべき語句を上位に持つものであつて、「唐櫃をめたく造り改めらるべき由」を受けてゐる事「唐櫃改造の事は沙汰止みになつた」(講話)の解釈を俟つまでもないのである。「その事に候」(一〇九段・二三六段)もこの意味における一変形であらう。

更に前の「その事」即ち定称の代名詞としての用例を二三他に拾つて見よう。

……(一七〇)

その事となきに人の来りてのどかに物語して帰りぬる
まればとの饗応などもついでをかしきやうにとりなし
たるもまことによけれどもその事となくとりいだし
たるいとよし(二三一)

等いづれも同じであるが、

けふはその事をなさむと思へど(一八九)

等は最もその意味が明かである。さればこそ「今日は斯ういふ事をしようと思つてると」(講話)や、「今日はあの

事をしようとして「カネテ」思つていても」（新講）の様な解釈が自然となされてゐる訳であらう。源氏物語にもこの様な「その事は」頻出するが、例へば

うるはしくおもりかにてその事の飽かぬかなと覚ゆることもなかりき…（若菜、下）

その事となくて対面もいと久しくなりにけり…（右に同じ）

等はそれである。後の例に対し、湖月抄が「さしたる事なくて対面なかりしと也」と註してゐる通りである。

臨時のもてあそびもののその物とあとも定まらぬは…（帯木）

は余りに有名であるが、賀茂真淵の新釈（評釈引用）に「たしかにいか様と其形の定まりなき器物なり」と見える。

「その事」の「そ」とは所謂聞き手を主体とした話し方に見られる中称の代名詞であるといふから、お互に諒解出来る定称が生れ、更に

それのとしのしはすのはつかあまりひとひの日（土佐日記）

の様な「某」の意味も出て来るのであらう。

さてやゝくどくしく述べすぎた嫌ひがあるが、早速五十六段の「ざえある人はその事」に上述の意味をあてはじめると、こゝの解釈は簡明な姿となつて打ち出される。即ち

学問才智のある人はこれく、かうである。

となる。かくてこの部分は批評の言葉として提示されたものとなり、後続の「など」が一層良く利いて来る。何となればこの事物を例示する副助詞は徒然草の場合

たゞ人もとねりなどたまはるはゆゝしとみゆ（初）の如き単なる体言の例示よりも

「われはさやと思ふ」などあそびにくみ…（二二）

「この人のちにはたれにかとはん」などいゝはるゝは…（一六八）

「いましばしけふは心閑かに」などいはんは…（二七〇）の如き言葉の例示の方が用例が多く、この様な表現において一つの啓蒙を企図する事は作者兼好にとつても得意とする所であつたらうと考へられるからである。

さて以上の様な解釈は管見によればたゞ武田裕吉博士著「徒然草新解」（昭二二）にのみ見出だし得た。即ち同書に説く所は

才は才智才能。人はのはは下のその事で受けてゐる。

「才能のある人はかやうである」の意。何か具体的な内容があるものを彼と指定した云ひ方。この条外にも解き方が取らぬ。

である。これは大体拙考と一致する解釈であつて、誠に意を強くした訳である。

それではこの解釈は武田博士や小考の事新しい説であるかといふに、必ずしもさうではなささうである。恐らく旧註の中には、説明が及んでゐないけれども、右の如く解したと思はれる節が伺はれる。例へば、盤斎抄が既に「いかほどと定むるに」と説いてゐるのは多分叙上の如き意味に解したのではなからうか。のみならず、「さやうの事どもあり」・「そのやうなるわざあり」と解いた文段抄・増補鉄槌ですらが「その事」の意味をある程度正しく取つてゐたかもしれない。むしろ正しい意味に解釈した旧註を、現代に続く諸註釈書が、一様に指示代名詞に誤り伝えてしまつたとも見られぬ事はないのである。この様な点で旧註といふものは、一見大雑把な解しか与へてゐない様でも、かへつて言外にその真意を伝へてゐるともいふべきではなからうか。

四

以上「その事」の解釈については武田博士の新解に賛するものであるが、小考の目的は同博士の高説に代辯的饒舌を弄するにあるのではない。

例へば文脈の見方についてはどうであらうか。博士によれば「をかしき事をいひても」以下段末までを一文と見な

し、「など定めあへる」は「をかしき事をいひても…才ある人はその事」を承けるものとしてをられる。これは極めて独創的な新しい解釈であると思ふ。併しこれが必ず正しいとする積極的理由もないから、姑く廻後しにして、更に問題となる「人の見さまのよしあし」以下の口訳を読んで見よう。即ち

人の見恰好の可否、才のある人はその事などと定めあつてゐるに：

とある。これは意外に曖昧な解釈文であるが、博士は恐らくこゝの文脈を「人の見さまのよしあし」と「才ある人」の二つの併立した主格に「その事」といふ述部がついた形であると見てをられるのではないかと思ふ。即ち塚本氏流に示せば

人の見さまのよしあし}はその事
(又)才ある人

となるのであらう。「才ある人」の上に「又」といふ接続詞を入れて解くのは文段抄が既に明示した所であつて、以来殆どの解がこの流を擲んでゐる訳であるが、それは逆つて文章をギョチナイものにして解釈してゐるのではないかと思ふ。

第一、主格と見立てた二つの併立句はあまりにチグハグで整つてゐない。凡そ古典解説に当り、接続詞のない二つ以上の句を併列させて、一つの述部で統一する手法は一

見、理路井然と割り切つたかの感を与へるものであるが、逆つて文の構造を機械的に処理し、その流麗さを等閑にした弊に陥りやすいものである。

又仮に前に示した塚本氏の文脈によつて

人のみざまのよしあし(ヤ)ざえある人はその事(コレコレ)など定めあへるに……

などとしてみて、これでは文章として成り立たないから、殆ど問題にならない。いづれにせよ併立させる事はこの場合都合が悪いのである。

以上の様な理由で、こゝは

人のみざまのよしあし(ニツイテ)「ざえある人はその事」など定めあへるに……

と見た方が遙かに文章として自然で、良くはなからうか。

即ち「人のみざまのよしあし」は「定めあへる」の連用修飾格又は目的格となり、「など」は已に述べた如く単に「ざえある人はその事」だけを承け、「定めあへる」の連用修飾格に立つことになるのであつて、「をかしき事」以下二つの文を包含した長い部分を承けると見た武田博士説よりも無理のない点が取得かと思ふ。この場合、主語はもとより仮定的な「世間の人々」一本になる。

さすれば「人のみざま」も自然と適訳が出て来るのではなからうか。敢へていへば、「みざま」は「身様」、「見

様」のいづれにせよ様子的事であつて、それも事に當つての態度を含めた広い意味での様子であると考へたい。従つて第五十六段は「久しくへだたりて」以下「品のほどはかられぬべき」までは世人に対する態度を具体的に叙し來たつて、最後に結論的に「人のみざまのよしあし云々」と述べたものと見てよいのではなからうか。かくて、この末尾の解釈は

(人々が)他人の態度の良し悪し(について)「学問才智のある人はかうである。」などと批評し合つてゐる際に、自分の身に引きかけて云ひ出したのは実となる。

かく解する時、この一文は何を意味するであらうか。それは結論を与へる気構へで書き出して、俄かに筆を転じて、結論的批評を述べる態度そのものを鋭く批判した形とも見なされるであらう。言ひ換へれば兼好みづからの自己批判である。甚だ散漫ではないかといふ謗りがあるかも知れないが、一方ではこれがいかにも「心のうつりゆくまゝ」なる、従つて又兼好の面目躍如たる、例の後半において読者の意表に出る構想の特色を發揮してゐる所とも考へられるのである。

(先学諸家の高説を駁したる非礼さがたく 一九五五・一一二〇)